

An abstract painting featuring bold, expressive brushstrokes in red and blue on a light background. The red strokes are thick and dynamic, while the blue strokes are more fluid and layered. The composition is energetic and non-representational.

岡本かの子全集

第九卷

岡本かの子全集

第九卷

T
A
R
O

TARO

岡本かの子全集 第九卷

昭和五〇年九月三〇日初版第一刷發行

著 者 岡本かの子

發行者 高橋直良

發行所 多樹社

東京都千代田區神田神保町二一八

電話東京二六四—〇三四六

振替東京七七五七

印刷所 株式會社太平洋社

製本所 有限會社三和製本所

製函所 株式會社光陽紙器製作所

本文用紙抄造 王子製紙春日井工場

表紙用クロス 日本クロス株式會社

裝 畫 岡本太郎

裝 幀 栃折久美子

第九卷 目次

綜合佛教聖典講話

第一講	般若心經より……………	三
第二講	修證義より……………	七
第三講	碧巖集より……………	一〇
第四講	法華經方便品より……………	一四
第五講	涅槃經より……………	一七
第六講	歎異鈔より……………	二〇
第七講	歌頌より……………	二四
第八講	祕藏寶鑰より……………	二六
第九講	百喻經より……………	二八

第十講	大乘起信論より……………	四
第十一講	一枚起請文より……………	四
第十二講	當體義鈔より……………	五
第十三講	即身成佛義より……………	五
第十四講	傳燈錄より……………	五
第十五講	佛教研究に進む方の爲に……………	五
觀音經（附、法華經）		

前篇

第一章	觀音の信仰……………	六
第二章	佛教の發達……………	三
中篇		
第一章	觀音宗……………	三
第二章	法華經概觀……………	六
第三章	天台學から法華經思想を……………	九

第四章	法華經	二三
-----	-----	----

後篇

第一章	觀音經序論	一五
-----	-------	----

第二章	妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五	二七
-----	-------------------	----

(附)觀音靈驗記新解釋		三〇
-------------	--	----

(附)巴里へ遺した自畫觀世音		三四
----------------	--	----

佛教讀本

第一課	悲觀と樂觀	二七
-----	-------	----

第二課	誰でも持ったから	二九
-----	----------	----

第三課	飽くまで生き抜く力	三二
-----	-----------	----

第四課	苦勞に就いて	三五
-----	--------	----

第五課	たしなみ	三八
-----	------	----

第六課	人情に殉じ、人情を完うす	三九
-----	--------------	----

第七課	性質を矯め過ぎるな	四六
-----	-----------	----

第八課	あまり放縱でも困る	二七
第九課	人生の廣い道	二九
第十課	人格完成	三〇
第十一課	世の中	三二
第十二課	衣食住	三三
第十三課	憂鬱と笑ひ	三五
第十四課	涙の價值	三七
第十五課	無駄	三八
第十六課	誤解された時	三〇
第十七課	誘惑	三四
第十八課	勇氣	三六
第十九課	好き嫌ひ	三八
第二十課	試合の練習	三九
第二十一課	橋は流れて水は流れず	四〇

第二十二課	敵、味方	二五二
第二十三課	不平の征服	二五三
第二十四課	軽い考へ方・重い考へ方	二六
第二十五課	母性愛	二九八
第二十六課	父性愛	三〇三
第二十七課	兄弟愛	三〇五
第二十八課	自分と他人	三〇七
第二十九課	慈悲	三一
第三十課	愛憎	三二四
第三十一課	性慾	三二六
第三十二課	戀愛	三三七
第三十三課	婚約の前に八方手を盡せ	三三九
第三十四課	結婚と夫婦愛	三三一
第三十五課	家庭	三四

第三十六課	ハムレット	三六
第三十七課	お茶時 チャイム	三七
第三十八課	饑 悔	三八
第三十九課	入學試験に臨んで	三九
第四十課	僻 み	三三
第四十一課	體 育	三七
第四十二課	虛 榮	四〇
第四十三課	時計と椅子と袴	四一
第四十四課	人間の味	四三
第四十五課	賞める・叱かる	四四
第四十六課	他 愛	四六
第四十七課	利己主義	四七
第四十八課	女のヒステリー	四九
第四十九課	仕 事	五三

第二十課	塹壕戰	三〇四
第五十一課	人間萬歲	三〇七
第五十二課	成功	三〇八
第五十三課	失敗	三〇九
第五十四課	金	三一〇
第五十五課	運命	三一六
第五十六課	達人の病苦觀	三一八
第五十七課	死	三二二
第五十八課	信仰に入る前の準備	三二四
第五十九課	迷信の話	三二五
第六十課	信仰	三二八
第六十一課	信仰生活のあらまし	三二九
第六十二課	佛、菩薩は染物屋に非ず	三三〇
第六十三課	智慧の説明	三三七

第六十四課	因果といふことの説明……………	三〇
第六十五課	唯物と唯心……………	三六
第六十六課	現實と理想……………	三七
第六十七課	光明中のハイキング……………	四〇
第六十八課	差別と平等……………	四一
第六十九課	都會と田舎……………	四六
第七十課	知られざる傑作……………	四二
第七十一課	モダン極樂・モダン地獄……………	四四
第七十二課	さとり……………	四六
第七十三課	佛陀……………	四八
第七十四課	聖德太子仰讀……………	四九
第七十五課	日本の佛教……………	五〇
解題・校訂……………		五三

佛
教
論
1

綜合佛教聖典講話

第一講 般若心經より

色は空に異らず。

空は色に異らず。

色即是空。空即是色。

受、想、行、識も亦復是の如し。

智慧のおしへ

釋尊の説かれた聖典も澤山ありますが、大體似よりのものを束ねまして、四つの部に分けてあります。其の中の一つに般若部はんじゃぶといふのがあります。般若といふのは、智慧といふ字の梵語を、音のまゝ漢字に宛て嵌めたものでありまして、此の部の聖典は人間の智慧を磨いて人生の苦勞も消し、又人格の向上も圖つて行かうとする其理論や方法を書いたものであります。

般若の面などゝ申して、神樂や子供のおもちゃに冠る凄^こい面がありますが、あの起りは智慧といふものゝ、鋭い齒切れのいゝところを表情で現したもので、後世使ふやうなあんな氣味の悪い嫉妬深い意味は、少しも無いのであります。

今のやうに使はれては、般若もさぞ迷惑だらうと思ひます。

其の般若部の中で、中心になつてゐる聖典は「大般若經」と申しまして、これは六百卷の大冊であります。それでは仲々學ぶのに骨が折れるといふので、其の中からまた要點の所だけを抜き取りまして作つた聖典が、般若心經であります。すつかりで二百五十字の短いお經であります。それでもこゝで講義するには長過ぎますので、其の中のまた肝心なところを二行ほど取り出しました。

それでは、智慧を磨いてどういふことを學んだら、人生の苦勞も消し、人格の向上にもなるのかといふと、此の般若部では「空」といふことを學ぶことになつて居ります。普通、世間でいふところの「空」は、何も無いとか、或は失くしてしまつた状態を指すのですが、佛教の方で使ふ「空」といふ字は、そういう意味ではなく執着せぬとか、こだはらぬとか或は自由さとかいふ意味を現はして居るのであります。此の事を覚え

て置いて頂いて、さて本文の解釋にかゝることにいたしませう。

肉體と新陳代謝

色は空に異らず。空は色に異らず。

此の句の中の色の字は、特に色と讀みます。色といふと戀愛や情事のやうに思はれ易いので、色とオンで讀むことになつてゐますが、佛教の方で色といふ字は、主に形のあるものゝことに使ひます。物質と取つてもよろしいのです。

即ち此の句の意味は、およそ形のあるものといつまでも永久に其の形に固着してゐるわけではない。どんな固定した形に見えるものでも、其の中味を調べると、きつと流動する自由さが備はつて居てこそ、其の形は常に保つて行けるのだと、斯ういふ事を上から下から反覆して説いたのであります。

これを、われわれの肉體に譬へて見ますと、此處に青葉茂子さんといふ女性があつて、いつも美しい。だが其のみづ／＼しい容貌や肉體は、三度食べる食物を吸収して、肉體を組織してゐる細胞が、刻々新陳代謝するので其の美しさが保つて行ける。生理學者に言はせると、人間の肉體は、凡そ七年目にすっかり質が代ると言ひます。

これを、若し細胞が「空」でなく、即ち一つの原形に嚙附いて居て、新陳代謝しなかつたら、青葉茂子さんは其の場に秋葉枯子さんになつて、お婆さんになるか或は直ぐ死んで了ふかも知れません。稽古事などもそうでせう。女學校時代に教はつたピアノの形式をいつまでも守つて「空」でなかつたら、

即ちこだはつてゐたら、いつまでも幼稚で進歩といふことはありません。

色即(じき)是(ぜ)空(くう)。空即(くうじき)是(ぜ)色(しき)。

これは右に説かれたやうな理をつとめて、再び繰返したまでです。日本の音楽の句などによく使はれ無常とか果敢ないとかいふ意味に使はれますが、大乘的即ち進化した佛教では、そう陰氣の意味には使ひません。

受(じゆ)、想(さう)、行(ぎやう)、識(しき)も亦復(またまた)是(ぜ)の如(ごと)し。

受はわれ／＼の心の受け容れる働き、想は考へ、行はどうかうしやうといふ意旨の働き、識は判断し分別する力、つまり「空」なのは形の肉體ばかりでなく、精神的のものもやつぱり流動する自由さを持つてゐるものだと言かれたのであります。精神上にも此の「空」あつてこそ、善きものは飽くまで同質の物を補充して詰めかへ、悪い物は捨て去つて善きに入れ代へる事が出来るのであります。

われ／＼が生活上苦にする事情でも、よく考へて見れば、其の性は「空」である。たとへば自分を誤解してゐる人があるとします。それが苦になる。然し考へて見れば誤解といふことは、こちらの實際と、向ふの観測と違ひがあるだけで、若し自分に強い自信を養へば、誤解する人が悪いのだと、何んでも無い氣持になれるし、若し又どうしても向ふの誤解を解く必要があつたら、進んで先の誤解を解く勇氣と力を出せばいいのだし、何れにしろ、誤解とても此の天地の間に在るものゝ一つである以上、聖典通りその原理は「空」なのだから、其の流動する自由さから時間が経ち、場所が替れば、いつか事實が判つて来る。斯ういふ確信を持つてば、もう其の誤解を呑んでしまつてゐます。其の呑んだ自信のこゝろが、また其の誤解を解く工夫をやるのに、自然と感化を及ぼして、方法を大變樂にさせます。

すべてが拘らず、流れてゐる。それでこそ因果歴然といふ法則が完全に行はれ、過不足のない圓滿な生活が、私達の上に持ち來たされるのであります。